



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

人麻呂歌集七夕歌における「月人をとこ」

著者	何 衛紅
著者別名	HE Weihong
雑誌名	Journal of the Faculty of Letters, Kobe Shoin Women's University : JOL
巻	4
ページ	1-8
発行年	2015-03-05
URL	http://doi.org/10.14946/00001673

人麻呂歌集七夕歌における「月人をとこ」

何 衛 紅

神戸松蔭女子学院大学文学部

Author's E-mail Address: heweih@sina.com heweihong@syoin.ac.jp

Tsukihit-wotoko in the Hitomaro Kashu

HE Weihong

Faculty of Letters, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本稿は人麻呂歌集の七夕歌に詠み込まれた「月人をとこ」の実像に迫ることを目的とするものである。七夕歌が生まれる以前の関係文献をレビューしながら、「月人をとこ」の表記について考察し、それから「月人をとこ」とはどういう存在かを考え、さらに人麻呂歌集の七夕歌における「月人をとこ」について再考を試みた。結論としては、「月人をとこ」の表記は西本願寺本の「牡」の方が「をとこ」の意に合うということ、「月人をとこ」という存在は「月人」にもヲトコとヲミナとの異同があると知ったうえで作り上げられたものであること、また、七夕歌の世界では「月人をとこ」は彦星・織女と同じく天の世界に住むため、二星会合を待ち遠しがる人々の間いかける対象となり、七夕説話の世界とかなり関係が薄いということがまとめられている。

This paper is intended to explore the real image of “Tsukihit-wotoko” in the “Tanabata No Uta (Song of the Star Festival) in the Hitomaro Kashu”. Through empirical study on relevant references, it is concluded that for the original record of “Tsukihit-wotoko”, the character “牡 (male)” in the “Nishi Honganji-bon Man'yōshū” should be more close to the meaning of “Tsukihit-wotoko”. Secondly, “Tsukihit-wotoko” should be a word created by the author when he understood that “Tsukihit-wotoko” could be either “wotoko (male)” or “womina (female)”. Finally, the reason why “Tsukihit-wotoko” was asked by people expecting the meeting of “Hikoboshi (Male Star) · Orihime (Weaving Princess)” in the “Tanabata No Uta”, is just that he also lives in the heaven, but not had any relationship with the Tanabata Story.

キーワード：万葉集、月人牡、呉剛、嫦娥

Key Words: Man'yōshū, Tanabata, Wu-gang, Chang-e

はじめに

『万葉集』巻十「秋雑歌」の冒頭に「柿本朝臣人麻呂之歌集出」という左注が付されている七夕の歌（一九九六～二〇三三）三八首があり、それに作者未詳の七夕歌（二〇三四～二〇九三）六〇首が加えられている。「月人をとこ」は人麻呂歌集七夕歌の一首、作者未詳七夕歌の二首に詠み込まれている。

今泉忠芳（二〇〇七）によると、人麻呂歌集に初出の「月人をとこ」に最初に着目したのは内田光彦（一九七二）であるという。その後、井出至（一九八二）は「月人をとこ」に着眼し、二星の七夕における逢瀬・分れのみをに向けていた従来の歌群配列論を書き換えた。さらに、渡瀬昌忠（一九九九）、西條勉（二〇〇〇）、今泉忠芳（二〇〇七）になると、「月人をとこ」は歌物語の展開に欠かせない存在として扱われるようになった。

先行研究において既に究明されたとおり、人麻呂歌集七夕歌は七夕詩文における牽牛・織女の二星悲恋という素材を生かして創作された歌群である。したがって、七夕詩文ないし関係漢籍における「月人をとこ」の実像を明かすことは人麻呂歌集七夕歌における「月人をとこ」をよりの確にとらえるためには大切だと考えられる。

一、「月人をとこ」の表記

「月人をとこ」が詠まれた歌は『万葉集』に五首収められている。その初出は「右柿本朝臣人麻呂之歌集出」という左注が付された次の歌とされている。

夕星毛 往来天道 及何時鹿 仰而将待 月人牡（二〇一〇）

夕星も通ふ天道をいつまでか仰きて待たむ月人をとこ

この歌は人麻呂歌集の七夕歌群の一首である。人麻呂歌集の七夕歌群に続き、作者未詳の七夕歌群も収められており、中には「月人をとこ」が詠まれた歌が二首ある。

秋風之 清夕 天漢 舟滂度 月人牡子（二〇四三）

秋風の清けきゆふべ天の川舟漕ぎ渡る月人をとこ

天原 徃射跡 白檀 挽而隠在 月人牡子（二〇五一）

天の原い行きて射むと白真弓ひきて隠せる月人をとこ

また、上記の三首と同じく巻十「秋雑歌」に編まれた「詠月」という題詞の歌で、次の一首にも「月人をとこ」が詠まれている。

天海 月船浮 桂楫 懸而滂所見 月人牡子（二二二三）

天の海に月の舟浮け桂楫懸けて漕ぐ見ゆ月人をとこ

以上に挙げた四首の歌に限って「月人をとこ」の表記を見ると、人麻呂歌集の一首に「月人牡」とある以外に、「月人牡子」が使われている。その訓み特に「牡」「牡子」の訓みは巻十五に収められた次の一首によって示されている。

於保夫祢尔 麻可治之自奴伎 宇奈波良乎 許藝亘天和多流 月人乎登祐（三六一一）

大船に真楫繁貫き海原を漕ぎ出て渡る月人をとこ
「七夕歌一首」が題詞となっているもので、しかも「右柿本朝臣人麻呂歌」の左注が付されている。

ここに挙げた「月人をとこ」の歌の原文はすべて西本願寺本を底本とする。『万葉集』の研究においてはテキストは西本願寺本を底本とするのが習いとなっているためである。しかし、刊行された『万葉集』のテキストを調べると、「をとこ」の表記はほぼ元暦校本や類聚古集、紀州本を参考に「牡」「牡子」から「牡」「牡子」に校訂されている。一体、どちらの方を「をとこ」の表記にすべきか、ここで万葉時代にあたる七・八世紀までの実際の用例から「牡」という文字の意味を考察する必要があると思われる。

『詩経』に見られる次の二例はよく知られている。

駟駟牡馬、在坰之野。(魯頌・駟)

濟盈不濡軌、雉鳴求其牡。(邶風・匏有苦葉)

「牡馬」はオスの馬のことで、「牡」は動物が雄性である意を表す。「雉鳴求其牡」は雉が鳴いてそのオスを求めるとというのが字面の意味である。

また、『儀礼・喪服』には、

疏衰裳、齊牡麻經、冠布纓、削杖、布帶、疏屨三年者。

とあり、中の「牡麻」について唐・賈公彥疏では、

喪服伝云、牡麻者、泉麻也。…。其實泉是雄麻、無実。

という注釈が付けられている。これは植物が雄性である意を表す「牡」の一例である。

また、『老子』において「牡」は「牝」と一対となっている。

含徳之厚、比于赤子。毒虫不螫、猛兽不据、攫鳥不搏。骨弱筋柔而握固。未知牝牡之合而媵作、精之至也。終日号而不嘎、和之至也。(第五十五章)

大国者下流、天下之交、天下之牝。牝常以静勝牡、以静為下。(第六十一章)

第五十五章の「牝牡之合」は男女和合のことをいうもので、その「牡」は明らかに「男」のことである。また、第六十一章の「牝常以静勝牡」は、牝は常に静を以って牡に勝つという意で、大国にとって柔軟・謙遜な態度の重要性を語るための比喩表現である。

一方、「牝牡」の表現は歴史書の天文に関する叙述にも見られている。例えば、『史記・天官書』には、

金在南曰牝牡、年谷熟。

とある。これに関して、唐・司馬貞『索隱』では「歳、阳也。太白、陰也。故曰牝牡也。」という晋灼の釈を引用しており、唐・張守節『正義』では『星経』を引用して、「金在南、木在北、名曰牝牡、年谷大熟。」と言っている。また、似たような叙述は『晋書・天文志』にも見られ、

太白在南、歳星在北、名曰牝牡、年谷大熟。

とあり、星同士の「牝牡之合」は豊穰の吉兆であると、『史記・天官書』と同じようなことを言っている。

ここまで行われてきた考察をまとめると、つまり、「牡」は動植物が雄性である意を表すほ

かに、男性のことを指す用例も古くから見られる。また、「牝」と一対となり、「牝牡之合」の組み合わせで男女和合のことをいい、天文関係の叙述ではさらに星同士の「陰陽之合」のことをいう用例すら見られるのである。

この結果を踏まえて「月人をとこ」の表記を改めて考えると、西本願寺本の「月人牝」「月人牝子」の方が「をとこ」の原意をよりの確に表すものだと言えるように思われる。また、品詞から言えば、「月人牝」の「牝」は「牝牡之合」「牝常に静勝牡」「雉鳴求其牡」の「牝」と同じで、名詞に属するものであるが、「月人牝子」の「牝」は「牡馬」「牡馬」の「牝」と同じで、形容詞的なものである。

一方、元暦校本や類聚古集、紀州本における「壮」「壮子」という表記はどうであろうか。紙幅の都合により、ここで実際の用例は挙げられないが、勇ましいこと・男らしいことという語義が示しているとおりに、「壮」は活力に満ちあふれた様子を表現する形容詞である。名詞として使われる用例も見られるが、三〇歳前後の元気で充実した年頃という意で使われており、雄性・男性という性別上の意で使われる用例は見当たらない。以上のような語義・品詞を考えると、「月人壮」「月人壮子」はとうてい「月人をとこ」の意にはならないのである。

二、「月人をとこ」という存在

「月人をとこ」は人麻呂歌集の七夕歌群にその初出が見られるため、人麻呂による創出だと考えられる。しかし、この初出の歌では「月人をとこ」は質問受け係のような存在というイメージしか浮かんでこない。

夕星も通ふ天道をいつまでか仰きて待たむ月人をとこ (二〇一〇)

「夕星も通う天の道を、いつまで仰いで待とうか、月人をとこよ」と、空を仰ぎ見ていて彦星・織女の二星会合を待ち遠しがる人々の焦りを詠む一首である。言うまでもないことかもしれないが、質問が月人になげかけられたのは、月人は彦星・織女と同じく天の世界に属するものだと考えられていたためであろう。しかし、月人はどのような存在だろうか、なぜ「牡(をとこ)」なのだろうか。「月人をとこ」という存在を解明するために、ここで人麻呂歌集時代における「月人」関係の既存文献を考察しておく。

前文にあげた「月人をとこ」の歌五首は「七夕」または「詠月」を主題とするものであるが、「をとこ」なしの「月人」は「詠黄葉」が題詞となる次の一首に見られる。

黄葉為 時尔成良之 月人 楓枝乃 色付見者 (二二〇二)

黄葉する時になるらし月人の桂の枝の色づく見れば

卷十の「秋雑歌」に収められた歌で、植物の紅葉する時期を詠んだものであるが、月の植物である「桂」の色づく枝が詠まれている。

月の中に桂があるという発想の出典として、唐・段成式(八〇三～八六三)『酉陽雜俎』における次の記述がよくあげられている。

旧言、月中有桂、有蟾蜍。故異書言、月桂高五百丈、下有一人常斫之、樹創随合。

人姓呉名剛、西河人。学仙有過、謫令伐樹。(卷一・天咫)

『酉陽雜俎』は九世紀に入った以後に完成したもので、人麻呂歌集よりものちの書物であるが、

「旧言」「異書言」が示しているように、古くから「月中有桂」「下有一人常斫之」といった話
 が言い伝えられてきたと考えられる。

「呉質」という名前に変わっているが、月の中で桂の木を切る男は、唐・李賀（約七九一～
 約八一七）の『李凭箜篌引』にも詠まれている。

呉質不眠倚桂樹、露脚斜飛湿寒兔。

後漢・王充（二十七～九十七）の『論衡』に「儒者曰、日中有三足鳥、月中有兔、蟾蜍」（卷
 十一・説日篇第三十二）という記述があり、「兔」は月の動物だと分かる。「桂樹」という月
 の植物および「寒兔」という月の動物から、この「呉質」はすなわち桂を切る呉剛のことだ
 とされている。

『万葉集』では「月人」と「桂」との強い関連性は次の「月人をとこ」の歌にも示唆されて
 いる。

天の海に月の舟浮け桂楫懸けて漕ぐ見ゆ月人をとこ（二二二三）

月の舟を楫を掛けて漕ぐ「月人をとこ」のことではあるが、楫の素材として桂が打ち出され
 ているのはなかなか興味深いと思われる。

「七夕歌」「詠月」の四首では「牡（をとこ）」という性別を示す語がつけられ、「月人をとこ」
 のことであるが、「詠黄葉」の一首（二二〇二）においては性別が分からない「月人」のこ
 ととなっている。通説では「月人」は「月人をとこ」の略称あるいは別称として扱われている
 のであるが、それでよいのであろうか。

月人の呉剛よりも遥かに古い時代の文献にはすでに月人のことが登場しており、すなわち
 よく知られている嫦娥のことである。漢以前の文献では嫦娥は「姮娥」と表記されており、
 前漢初期の『淮南子』に見られる次の文句がよく引用されている。

羿請不死之藥於西王母、姮娥窃以奔月。（卷六・覽冥訓）

しかし、その原文をみると「譬若羿請不死之藥於西王母、姮娥窃以奔月、悵然有喪、無以続之」
 とあり、「姮娥」のことは周知の話として比喩に使われているのである。この話については後
 漢・高誘によって次のような注が付けられている。

姮娥、羿妻也。羿請不死之藥於西王母、未及服之、姮娥盜食之、得仙奔入月中、為月
 精也。

『淮南子』よりも古い時代には「姮娥」の話がすでに伝えられていたとすることができる。

上記の『淮南子』注には話の出典が明記されていないが、梁・劉勰（約四六五～五二〇）
 の『文心彫龍』には

婦藏之經、大明迂怪、乃称羿斃十日、姮娥奔月。殷湯如茲、况諸子乎（諸子第十七）

とあり、殷商の時代の書物である『婦藏』にはすでに「姮娥」の話が記されていることが分
 かる。

また、梁・蕭統『文選』に収められた王僧達の「祭顔光祿文」には「涼陰掩軒、娥月寢輝」
 とあり、これについて唐・李善の注には

周易、婦藏曰、昔日常娥以西王母不死之藥服之、遂奔月、為月精。

と見られ、「姮娥」の出典として、『文心彫龍』と同じく『婦藏』が明記されている。つまり、

「姮娥」が西王母の不死の薬を飲んで月に昇った話は遙か古い時代に作り上げられたものなのである。

以上で「月人」の話をめぐって考察したように、「月人」は二名も存在しており、ヲトコの「呉剛」とヲミナの「姮娥」である。ヲミナの月人である「姮娥」も「桂の樹」となかなか関わりが深いことは、唐代初期の類書である『芸文類聚』に見られる次の文句から分かる。

若上元之隔絳河、直置清高。類姮娥之依桂樹、令淑之至。(卷十六儲宮部・魏温子昇 常山公主碑)

中の「姮娥之依桂樹」と前文にあげられた「呉質不眠倚桂樹」はほぼ同じような構文を見せているが、主人公はそれぞれヲミナとヲトコで性別が異なっている。

以上の考察を踏まえて、『万葉集』の「月人」・「月人をとこ」のことをあらためて考えると、今までの通説と違う結論ができそうである。「詠黄葉」の一首「黄葉する時になるらし月人の桂の枝の色づく見れば」(二二〇二)では、「月人」は性別を示す語がついていないため、ヲトコとヲミナのどちらとも考えられるようである。一方、「月人をとこ」の歌では、「月人」にもヲトコとヲミナとの異同があると知ったうえで、「ヲトコ」の方が取り上げられているのだというように思われる。

しかし、人麻呂歌集の七夕歌では、なぜ「月人」しかも「月人をとこ」のことが取り上げられているのだろうか。

三、人麻呂歌集における「月人をとこ」

周知のとおり、七夕歌は人麻呂歌集が初出だとされており、「月人をとこ」は人麻呂による創出だと考えられている。彦星・織女の二星を主人公とする七夕歌の世界に「月人」を登場させるきっかけは何だったのであろうか。

すでに前文にあげられた唐代初期の類書である『芸文類聚』の「七夕」には、次のような詩句が見られる。

婺女儷經星、姮娥栖飛月。慚無二媛靈、託身侍天闕。(宋・顔延之「為織女贈牽牛詩」)

玉匣卷懸衣、針樓开夜扉。姮娥隨月落、織女逐星移。(梁・庾肩吾「七夕詩」)

ヲミナの「姮娥」ではあるが、「月人」はすでに七夕詩に取り上げられている。また、「姮娥隨月落、織女逐星移」が示しているように、「姮娥」は「織女」と対句で使われることもある。「月人」が詠み込まれた七夕歌は、このような七夕詩の延長線にあるものだと十分に考えられる。しかし、七夕歌の世界になると、ヲミナの「月人」ではなく、「月人をとこ」が詠み込まれている。一方、七夕詩の世界では、ヲトコの「月人」である「呉剛」の登場は少なくとも既存の文献では見当たらない。

本稿ではあくまで文献学的研究を貫こうとしているのであるが、七夕詩の世界に登場したヲミナの「月人」が人麻呂歌集の中で「月人をとこ」と取り換えられた背景については推測するしかない。あえて推測してみると、人麻呂歌集の時代では、遙か古い時代に作りあげられた「姮娥」というヲミナの「月人」と比べて、「呉剛」というヲトコの「月人」の方がより新鮮で面白みのある存在だったためと考えられなくもない。

上記の二首が示しているように、七夕詩の世界では「月人」の「姮娥」はただ、女主人公である織女の対照的な存在として扱われ、七夕説話の世界とかなり関係性が薄い。一方、二〇一〇番の「月人をとこ」の歌をみると、人麻呂歌集の七夕歌についても同じようなことが言えると思われる。「夕星も通ふ天道をいつまでか仰きて待たむ月人をとこ」と問いかけている地上世界の人にとっては、「月人をとこ」は彦星・織女と同じく天の世界に住み、二星のことをより知っている存在にほかならず、七夕説話の世界に登場するわけがないものなのである。

本稿の「はじめに」で触れたように、先行研究では「月人をとこ」は二星の悲恋物語に重要な働きをかけた存在として指摘されているが、その結論を認めるのは無理があるようである。

おわりに

先行研究では、人麻呂歌集の七夕歌における「月人をとこ」は、船守のような存在ともされている。そして、根拠として次の三首が挙げられている。

秋風の清けきゆふべ天の川舟漕ぎ渡る月人をとこ（二〇四三）

天の海に月の舟浮け桂楫懸けて漕ぐ見ゆ月人をとこ（二二二三）

大船に真楫繁貫き海原を漕ぎ出て渡る月人をとこ（三六一一）

「月人をとこ」についてはこの三首によって確かに天の川を漕ぎ渡るという船守のようなイメージが与えられているが、しかしそれはあくまでも人麻呂歌集の後にできたイメージで、人麻呂歌集の七夕歌群の読解にはとうてい用いられないのであろう。ただ、天の川を漕ぎ渡るといふ船守のようなイメージの裏にはまたどういふ話が潜まれているかは確かに探究する必要がある。

また、次の一首には「月人をとこ」の勇ましく強い一面も詠み込まれている。

天の原い行きて射むと白真弓ひきて隠せる月人をとこ（二〇五一）

白真弓を引く「月人をとこ」は天の原へ行つて何を射ようとするのだろうか。その背景となる「月人」の話に関しても今後の文献学的研究を俟つところである。

文献

- 一、倉林正次「七夕歌とその儀礼的背景」（倉林正次『饗宴の研究』桜楓社、一九六九年）
- 二、大久保正「人麻呂歌集七夕歌の位相」（大久保正『万葉集の諸相』明治書院、一九八〇年「初出は一九七五年」）二〇七～二四四頁。
- 三、井出至「万葉集七夕歌の配列と構造」（『万葉』一一一、一九八二年九月）一～三十頁
- 四、渡瀬昌忠「人麻呂歌集七夕歌群の構造——その第三十一首まで——」（『万葉』一六九、一九九九年）三十～四十二頁。
- 五、西条勉「人麻呂歌集七夕歌の生態」（橋本達男編『柿本人麻呂全』笠間書院、二〇〇〇年）

二五八～二七一頁。

六、今泉忠芳『柿本朝臣人麿之譚集七夕歌』（御津磯夫記念館、二〇〇七年五月）

七、今泉忠芳『柿本朝臣人麿之譚集七夕歌表記論』（御津磯夫記念館、二〇〇七年八月）

（受付日：2014. 12. 10）